ピエロの涙

—心の痛みとどう向き合うか—

Pierrot's Teardrops
—How Do We Face Mental Pain ?—

今泉 寛

HIROSHI IMAIZUMI, PhD, PT

School for the Visually Impaired, University of Tsukuba: 3-27-6 Mejirodai, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8684, Japan.
TEL +81 3-3943-5421

Rigakuryoho Kagaku 15(3): 95-98, 2000. Received Jun. 20, 2000.

ABSTRACT: The mental damage gives us real pain at the time when we get through a crisis and can afford the realities of life, and few data exist on the mechanism and treatment method of mental pain. This review introduces my personal opinions on how I faced my mental pain, referring to the matters I learned by experience.

Key words: mental pain, how to face mental pain, my suggestion

要旨: 真の心の痛みは危機を脱し、現実が見え始めた頃から襲ってくる。しかしそのメカニズムや治療法は不明な点が多い。今回は、私の体験から学んで来た事がらを中心に、どう向き合おうとして来たか、私見を述べる。

キーワード: 心の痛み、向き合い方、私の提言

筑波大学附属盲学校専攻科理学療法科：東京都文京区目白台 3-27-6 (〒112-8684) TEL 03-3943-5424

受付日 2000年6月20日

I. はじめに

現代社会における病理的矛盾を象徴するかのような謂れなき犯罪や事故、さらには思いもかけない災害などのショックやストレスによってもたらされたPTSP、心身症など、いわゆる「トラウマ」(Trauma)に対する関心が今、ようやく高まって来た。

物心ついた頃、既に三重障害児にして超オチコボレ児だった私は、この50年余り、ずうっと「心の傷、痛み」と向き合い続けながら生きて来たような気がする。と言うよりは、むしろオロオロと傷口を押さえながら、“痛み”と言うライバルと競い合う中で育てられて来たのかもしれない。

今、私は「心の痛み」と向き合うと言う事は結局のところ、“どういう生き方を求め続けて行こうとするのか”と言う事に他ならないのではないかと、そう考えている。心の傷、痛みとどう向き合って行けばいいのか、今回は数字や諸学説からではなく、あく迄私自身のささやかな体験をもとに幾許かの私見を述べさせて戴く。

II. 私見その1

「トラウマ」を乗り越えさせるか

1. 心の痛みの特徴

- 1) 真の痛みは現実が見え始めた頃、事態が膠着しつつある時期に起こる。直後はショック、パニック状態となり、「何とかしなければ」との焦りはあるものの、常に多くの人が傍に在り、結果として「心の緊張」が保たれている。むしろ周囲から見れば「危機を脱し」ホットして離れ始めた頃、未来への不安と恐怖、孤独が襲う。
- 2) 痛みは発作的不定期に再発し、環境次第で傷を深める。特に常識論的見せかけの“同情や慰め”、“励まし”は必ずと言っていい程傷口を広げ深める。
- 3) 時間と涙、そして無言の真心は徐々に心の傷を癒し、痛みを和らげてくれる。さり気ない関係の中で「この人は本気で自分を心配し、祈ってくれているのだ」と知った時、その有り難さに滲み出る“温かい涙”はどれ程心の傷を洗い清め、勇気を与えてくれる事だろう。

2. 心の傷を深め、回復を阻害しているものは何か。

- 1) 興味に根ざした親切、同情、流言、誹謗、干渉(特に肩書きや白衣による“奢り”)

- 2) 傍観者の利己主義(エゴイズム)、常に自分が優位者である事を前提とした同情、親切、支援。
- 3) 知育優先の教育体制と豊かさや、自由の履き違い、権利と義務、自由と責任、公と私、知力と行動力、願望と現実などの乖離。
- 4) 危機管理及び社会保障制度の不備、縦型行政、民間保険医療への依存、被害者救済制度。
3. 回復のためには何が必要か。
 - 1) 被害者に対する公的保障(医療費、生活費、休業損害補償)。
 - 2) プライバシーの保護と支援(一人きりで思いっきり泣ける環境と、求められた時いつでも手がさし伸べられる支援体制、そして自分で立ち直るしかないのだと主体的に覚悟するまでに至る期間の保障が不可欠)。
 - 3) 医療、保健、福祉行政の一体化と関係者の再教育(連携システムの確立と謙虚で冷静、使命感を兼ね備えた人材の育成)。
 - 4) 米国FEMAレベルの危機管理システムの確立と専門職の養成(銀行救済や国防予算レベルで取り組むべきと考える)。
 - 5) 教育の在り方への見直しを。知育優先からさまざまな体験の機会作りを重視し、主体的な行動力と個性を生かした問題解決能力を高めること。さらには事実を直視し、本気で向き合っていく中で“本物”を求め、挫折を味わい、努力する事の尊さ、いのちの大切さ、不正や差別に対する批判力と立ち向かう勇気、行動力を養う機会をぜひ、保障してやりたいと切に願うばかりである。

III. 私見その2

「惨めな体験もまた力なり」

1. 学びの足跡

1) おぼっちゃま時代

物心ついた頃、既に両眼弱視、右難聴、左顔面ケロイドと言う三重障害児だった私は、遊びの中での差別といじめを通して自らの境遇を自覚すると共に家にあっては“泣き分けの術”で家族を翻弄する一方、外にあっては何をされても涙一つ見せず、親にも告げず、学校も休まない“超オチコボレ児”だった。おそらく学校では一人ぼっちの私にピアノを弾いて下さる担任や励まし続けて下さった校長先生が在り、思いつき可愛がってくれた母や姉を心配させまいと

した「ケナゲ」な幼心だったのだろう。

2) 思春期時代

町の大火による裁判騒動の中、益々エスカレートするいじめに対し、猛烈な反発心と復讐心に燃えながら“耳学”を会得すると共に爆発的な乱読と独学の妙に目覚めた時期だった。成績も学年ベスト10入りし、特別表彰を受けた事は、大いに励みとなった。また“ピエロの術”(攻撃される前にオドケ、自分を蔑んで見せる事で躲す術)によって自分をコントロールする一方、生涯をかけて医学、教育、音楽、文学を志し続けようと決意したのもこの時期であった。

3) 大学時代

家庭の事情で進学の道を絶たれ、家出同然で苦学の道を選んだものの、貧困の中で生活や社会、人生に対する矛盾に苦悩する日々だった。一方、三療の免許を手にするべく不法を承知で二重学籍で盲学校に入り、あがく中一生の師、友にも恵まれた。

4) 整形外科助手からPTへ

2年間必死で独学、かろうじて特例措置でPTと成り、反対を押して結婚、レッドパージで失っていた労組を結成、患者クラブや民謡研究など多方面で活動した。東京へ移った後、今なお続く悪友や心から信頼できるDr.との出会いに恵まれた。

2. 新たな試練と学び

さまざまな体験や多くの人々との出会いの中で学び、支えて頂き「多少の苦勞ならくじけず生きて行ける」との自負めいたものが芽生え始めた私に訪れたものは、“生きる望みさえ”失いかけた程の三度の大きな試練だった。

1) 不意の爆発事故(’75年10月)

自分の不注意からガス爆発事件を起こし、救急病院のICUに6ヶ月入院、その後も十数回の手術を受けるため入退院をくり返した。最も苦しかったのは「果たして仕事に復帰出来るだろうか」、「どうやって妻子を養って行けばいいのか」との未来への不安と共に、不思議な事に「歌が唄えなくなるのでは、楽器は弾けるようになるのか」との心配だった。

2) 進行癌による先妻の死(’91年6月)

20年間共に生き、事故の苦しみを支えてくれた妻に先立たれ、育ち盛りの3人の息子を抱えての生活もさる事ながら、更に心の傷を深くしたのが「告知さえしてくれたなら納得出来る迄看病してやれたのに」と言う親戚からの恨み言と、仏壇やお墓、貯金の管理まで指図して下さる“生活への干渉”と“親切”であった。

3) 長男の交通事故(’97年9月)と死(’99年7月)

“死”への恐怖、とてつもない高額医療費、名ばかりの公的保障、あまりにも親切そうな周囲の人々の“目”、“顔”、“言葉”。そしてさまざまな自責の念…。幼い頃、私の伴奏でよく唄っていた「カラスの赤ちゃん」を今なお私は歌えずにいる。

3. 私を支え、生かし続けて下さった“力”は何だったのか。

1) 堅実なプロの技術と真心

緊急時、異常事態にあった私を最も安心させ希望を与えてくれた力は、特別な配慮や情熱よりむしろ冷静な態度と、成すべき事を淡々とこなして下さった技術、そして苦しい時さり気なく傍に来て下さった真心だった事を、今もって明瞭に記憶している。

2) 肉親そして友の変わらない愛情

「いっそあの時死んでいた方が」と苦悩する私に、言ってくれた母の言葉は、「私には何も変わってやれない、だから一生懸命祈ってる」。「苦しい時程人は真価が問われる、今あきらめたら今迄何のために生きて来たんだ」だった。また絶望しかけて居た私に、ある友人の医師が「難しい切断の手術をするので、助言してくれるだけでいい、傍に居てくれないか」と依頼してくれた。さらにある友は、彼自身が否定して来た事を、私の望みのためにあえて正月休みを返上し協力してくれたのだ。これ以上の真心があるだろうか！

3) 保健、保険、公的保障、貯金

積立金を払っていたとは言え、健康保険制度と生命保険は、そして貧弱ながらも労災制度は間違いなく生活を救ってくれた。もしこれ等の制度に加入していなかったら恐らく今の生活も、家も無かった事だろう。

4) 自分を夢中にさせてくれる“本物”の世界の存在

人間の全知全能の結晶とも言える音楽、芸術、そして文学、これ等の果てしない魅力と深い世界が、傷つき易い私の心をどれ程癒し、励まし、勇気づけてくれた事か、そして幾人もの方々から「つらい時あなたの歌を聞いている」と喜んで戴く事のうれしさ、有り難さ。私は生き続ける限り求め続けて行こうと思う。

5) 差別や不正を憎むエネルギーと愛情

長い期間一つの事を成そうと努力し続けるためには、それなりの志向性(価値観、目標)と、エネルギーが必要である。私の場合幼い頃から味わい続けた“差

別”や“いじめ”への屈辱感、反発心がエネルギーとなり、医療や教育、地域活動へと向かわせ、延いては“心の傷、痛み”と向き合い続ける“力”ともなってくれたのではないか。さらにまた、そうした「憎しみ」のエネルギーを「非社会的」方向に向けさせなかった“力”もまた、肉親や師、多くの友が私に向けてくれた“心のエネルギー”“愛”だったのではないか、今、私はそう信じている。

IV. 6つのQ and A

私はよく以下のような質問を受ける。この機会に簡潔にお答えしておこうと思う。

Q1 何故いつもそんなに楽しそうに朗らかにしているのか？

A 苦しみや悲しみを沢山味わって来ました。ですから今、生きていられる事、それ自体が嬉しくてたまらないのです。

Q2 何故「月光仮面スタイル」を続けるのか？

A 第一にこの姿が私そのものですし、第二に私を見つめて下さる方の反応で、ある程度のその方の価値観が伺えます。第三に形成術に要する費用を他に廻したいからです。

Q3 歌のCDは何のため？

A 重度の障害を残したまま退院せざるを得なかった患者さんへの“お詫び”のつもりで作り始めました。決してプレゼント用の「monster CD」,「ホラービデオ」ではなかったのです。それに“歌っている時こそ”本当に心から素直な自分を感じます。

Q4 “不幸自慢大会”は何のため？

A その場に集い合った方達で“誰が一番不幸か”を競い合うのです。始めは「聞くも涙、語るも涙」ですが、次第に連帯感が生まれ、殆どの場合、結論が出る前に“笑い”の内に終わってしまいます。一度試されては？

Q5 50歳過ぎて教師になった訳は？

A 学び続けて来た事を教育実践の場で試して見たかったからです。お蔭様で若者たちと本気で向き合う中で得た“望外の喜び”と共に「真の人の表裏」や「民主主義」の意味など、多くの事を学びました。目標達成率200%でした。

Q6 最も厳しい中で、どうして学位を目指したのか？

A 自力のみではどうしようもない難問が山積みする中で“生きる気力と自分”を失いかけたからです。

自分を「粹」から乗り越えさせてくれる夢が、目標が、欲しかったのです。“生きている証”を求めたのです。

V. 結 び

以上、拙いながら体験の中から学び続けてきた私なりの“心の傷、痛みへの向き合い方”を述べて来た。今、「果たして自分は患者さんや学生、そして我が子等にどれだけの事をして来たと言えるだろうか」と、改めて問い直す時、甚だ心許無い気がしてならない。せめて「白衣や立場をカサに」人の心に“土足で踏み込むような”事だけはしたくない。これからも謙虚に、真剣に向き合い続けて行く中で最悪を覚悟し、なお備えて行くための勇気と努力する力を見出すために、共に歩み続けて行こうと思う。最後に今日までこのような私を支え続け、一種2級の身体障害を押して家事一切を切り盛りし、笑顔を絶やした事のない妻純子に、心から感謝の意を表し本稿を結ぶ。

参考文献

- 1) 児玉俊夫：リウマチの話し。臨床理学療法, 1973, 1 (1): 1-24.
- 2) 深沢 道子：患者の心理にどう処方するか。臨床理学療法, 1974, 1(2): 3-37.
- 3) 今泉 寛：母の心。こぶしの里 (青梅愛弘園), 1985, 1: 51-53.
- 4) 今泉 寛：厳しさの中にこそ。こぶしの里 (青梅愛弘園), 1986, 2: 10-13.
- 5) 今泉 寛：しかともの話し。こぶしの里 (青梅愛弘園), 1987, 3: 62-64.
- 6) 今泉 寛：人は何で生きるか。こぶしの里 (青梅愛弘園), 1989, 5: 51-52.
- 7) 今泉 寛：先生になりきれなかったダメオヤジ。ちくば会々報, 2000, 1: 12-13.

推薦図書

- 高木敏子：ガラスのうさぎ, 金の星社, 1977.
 土屋由岐雄：かわいそうなぞう, 金の星社, 1977.
 山口勇子：おこりじぞう, 金の星社, 1979.
 梁 敏子, 手島 悠介：やせっぽっちのチア, ほるぷ出版, 1982.
 丸木 俊：ひろしまのピカ, 小峰書店, 1984.
 星野富弘：風の旅, 立風書房, 1989.
 相田みつを：にんげんだもの, 文化出版局, 1990.
 フランクル, 霜山徳雨 (訳)：夜と霧, みすず書房, 1971.
 芥川龍之介：鼻, 講談社, 1985.
 石坂直行：ヨーロッパ車いすひとり旅, 日本放送出版協会, 1973.
 花田春兆：折れたクレヨン, ふどう社, 1980.
 中村 哲：ベジャワールからの報告, 河合文化研究所, 1990.
 中坊公平：罪なくして罰せず, 朝日新聞社, 1999.